

感染症レジデントマニュアル 第3版

藤本 卓司, 伊東 直哉, 寺田 教彦(編)

洛和会丸太町病院副院長/救急・総合診療科

上田 剛士

全ての臨床医のための感染症診療の羅針盤

待望の改訂となった本書を手に取りました。初版から21年、前作から数えても12年の月日が流れましたが、本書が放つ「臨床の熱量」は微塵も衰えておりません。

◆変わらぬ「根幹」と、深化する「アート」

感染症診療の世界は、この20年で劇的に変化しました。質量分析器が普及し、細菌の分類がいくつも変更となり、COVID-19が世界を揺るがしました。しかし、編者の藤本卓司氏が序文で断言するように、診療の「根幹」は微塵も揺るぎません。

詳細な病歴聴取、徹底した身体診察、そして自ら行うグラム染色。この泥臭くも論理的なプロセスこそが、感染症診療の本質であり「アート」なのです。本書は、最新のエビデンスという「サイエンス」を、この不変のアートに融合させる手法を提示しています。

◆「単著」の魂を継承した「知の集合体」

第3版の最大の転換点は、藤本氏の単著から、伊東直哉氏、寺田教彦氏を加えたチーム体制へと進化したことでしょう。通常、多人数執筆は記述の方向性や熱量が分散しがちですが、本書はその懸念を見事に裏切ります。

本書を特徴付けるのは、多人数執筆でありながら驚くほどの統一感を備えている点です。藤本氏が原稿の一字一句にまで目を通し、計18回もの議論を重ねたことで、読者はあたかも一人の医師と対話しているかのような感覚を得ます。そしてこの統一感は、実際に“共に患者を診て、共に検体を染めた”仲間たちが執筆に参加したことで、机上の説明ではなく、臨床現場の湿度を帯びた文章へと結実しています。ESBL産生菌の地域差など、現場で意思決定に迷う論点にも踏み込み、情報の質を格段に高めています。

さらに本書の中心にあるのは、問診・診察・グラム染色という、普遍にして揺るぎない「三種の神器」です。刷新されたグラム染色アトラスは、顕微鏡越しの微小な世界を“美しい”と感じられるほどの解像度と迫力をもち、身体診察ではlate inspiratory crackleなどの所見を共通言語として扱う意義が丁寧に語られます。それらは、検査数値に寄りかかりすぎた日常の診療姿勢を心地よく揺さぶります。

そして、本文に彩りを添えるMemoは前版の2倍に拡充され、先人から継承された知識や物語が凝縮されています。読み進めるうちに、単なる補足情報以上の“息遣いのある臨床知”として胸に響いてきます。

◆次世代のジェネラリストへ

「All physicians should be general(全ての医師はジェネラルであるべきだ)」。この言葉通り、本書は感染症専門医をめざす者だけでなく、全ての臨床医にとっての羅針盤となるであろうものです。

薬剤耐性菌の脅威が増す現代において、可能な限り「狭域スペクトラム」を選択する本書のスタンスは、かつてないほど重要性を増しています。効率化の名の下に身体診察やグラム染色が軽視されがちな今こそ、本書をポケットに忍ばせ、ベッドサイドへ向かってほしいと思います。そこには、最新のサイエンスによって裏打ちされた、決して古びることのない臨床のアートが息づいているはずです。



●B6 変型/頁600/2025 年
定価：5,500 円
(本体 5,000 円 + 税 10%)
[ISBN978-4-260-05780-6]
医学書院 刊